吉田茂と大磯の歴史的魅力を考えるシンポジウムを開催

旧吉田茂邸の再建の意義を全国に向けて発信するため、神奈川県・(財)吉田茂国際基金／西武鉄道(株)との共催でシンポジウムを開催します。

【日時】
2月5日(金)
14時～17時(開場13時30分～)

【場所】
グランドプリンスホテル赤坂
赤瑛の間(東京都千代田区)

【内容】
・基調講演
五百籏頭眞(いおきべまこと)氏(防衛大学校長)
・パネルディスカッション
柴田紳一氏(國學院大學准教授)、五百籏頭眞氏、松沢成文県知事

【参加費】
無料

▶写真撮影／吉岡専造氏

【申込方法(FAX又は電話)】
・ファックスでお申込みの場合は、参加希望者全員の
①住所
②氏名(在住市町村名のみ)
③電話番号
④シンポジウムの名称(吉田茂と大磯の歴史的魅力を考えるシンポジウム)
をご記入のうえ、お申込みください。
・電話による申込みも可能です。

【申込期限】
1月20日(水)

【定員】
250名
※申込者数が定員を超えた場合は抽選となります。

◎申込み・問い合わせ
神奈川県都市整備公園課
都市公園計画班
☎045(210)6218
FAX045(210)8883

旧吉田茂邸再建に向けて　連載シリーズ4

大磯の賢人　吉田茂

外務省の異端児

明治39年、吉田茂は外務省に入省、同期には後に総理大臣となる広田弘毅がいました。吉田は明治40年、領事館補として奉天在勤を命じられます。吉田が奉天へ赴任するにあたり、実父・竹内綱は懇意であった奉天総領事・萩原守一に紹介状を書きましたが、吉田は帰朝命令が出て離任する時、初めてこの紹介状を萩原に渡しました。なぜ着任の時に出さなかったのか萩原に詰問されると、吉田は「親の七光りは嫌いです」(『世界と日本』)と答えたといいます。

後年、「如何に自惚れてみても、外務省の秀才コース、出世街道を歩いてきたとはいえない」(『回想十年』第四巻)と述懐しているように、当時外交官の表街道が英国や米国であったのに対し、吉田は欧州在勤の僅かな期間を除き、大半を中国で過ごす裏街道ともいえる外交官生活を送っています。しかし、この長きにわたる中国勤務、いわゆるチャイナ・サービスは、列国による国益追求を目的とした様々な外交術策が繰り広げられる状況を目の当たりにすることで、吉田の外交手腕に磨きをかける場となったのです。

その後、ロンドン総領事館(領事官補)、イタリア大使館(三等書記官)へと転任し、大正元年には安東領事を命じられました。安東(現・中国遼寧省丹東)は朝鮮との国境である鴨緑江(おうりょくこう)に面した場所です。吉田は奉天時代に陸軍大臣・寺内正毅の知遇を得ていたことから、朝鮮総督である寺内に対する外務省の接伴役として任命されました。寺内は何事にも物怖じしない吉田の性格を大変可愛がり、吉田も寺内の親切心から生じる厳格さと、時折見せる無邪気な一面を敬慕していたようです。余談ですが、寺内は大正7年に大磯に別邸を構えています。

大正5年、寺内が総理大臣に就任すると、吉田も東京に呼び出され、寺内から直に秘書官就任の要請を受けました。しかし吉田は「総理大臣ならつとまるかもしれませんが、秘書官はとてもつとまりません」(『回想十年』第四巻)と返答し、秘書官の職を棒に振ってしまいます。間もなくワシントン大使館勤務を命じられますが、安東在勤時代に対華二十一ヶ条要求に反対論を唱えたことが取り上げられ、結局は文書課長心得に任命されました。左遷ともいえるこの人事を不満に思っていた吉田は、当時の外務次官・幣原喜重郎の呼鈴を無視するなどして次官に楯ついたのです。そのためか、本省勤務は長続きせず、大正7年に済南(さいなん)領事に任命されます。

▲1907年奉天領事館補のときの吉田茂(写真／吉岡氏所蔵)

◎問い合わせ　郷土資料館
学芸員(臨時職員)　曽根田
☎(61)4700